

中村は、三人の外国人招待講演者と横山を連れて、銀座のクラブに来ていた。ふたりのアメリカ人は銀座ははじめてという。もうひとりのドイツ人は、銀座にショッピングに来たことはあるが、こういう店は初めてだと言っている。三人とも興味津々という感じで店の内装や、女の子が他の客を接待する様子を眺めている。ここは、かつて喬の母玲子が働いていた店である。いまでも、時々、中村は飲みに来ていた。現在のママは、かつて玲子の妹分であった加奈子である。もし、中村と出会っていなければ、玲子がこの店を継いでいたかもしれない。

加奈子は、はじめて見る横山に驚いていた。

「顔が玲子さんにそっくりね」

と目を細めている。

横山は、母に似ていると言われたことがなかったのでびっくりした。海外からの招待客は、

「これがギンザか」

と感激している。

この店は銀座の中でも上品さで売っているのだから、ホステスにも知的な雰囲気漂わせた子が多い。英会話のできる子が居て、加奈子のはからいで、中村のテーブルには英語のできる子がついていて。

実は、前もって予約しておけば、この店では和食やフランス料理のコースも頼むことができる。中村は、かにをメインとした和食のコースを頼んでいた。毛蟹を食べたことのない海外の人には、その舌ざわりが格別なようだ。

最近の高級クラブでは分煙にする店が増えているが、ここは銀座では珍しく完全禁煙の店であった。喫煙者はVIPルームと呼ばれる個室でタバコを吸うことができる。世界の中で、日本は喫煙対策ではもっとも遅れている国と言われている。信じられないことに、国際会議のバンケット会場でも平気で喫煙ができる。禁煙が当たり前の海外研究者にとっては、苦痛の種なのだ。

招待講演者は、旧来からの中村の友人であるが、この場所では研究の話はやめようと思ったようだ。というのも、国際関係が話題になると、アメリカ対ドイツという色合いが強まり、互いに牽制しあうからである。時には、喧嘩と見まがう議論になることもしばしばである。

横山のことを

「この会議を主催している黎明学園大学のアソシエイト・プロフェッサーで、この会議の実行委員をしている」

と中村は紹介した。まさか、自分の息子とは紹介できなであろう。横山にとっても、中村と招待客たちが研究の話をしたら全くついていけない。話題の中心が日本文化であったので、ほっとしていた。

外国人たちが店の女の子たちと興じていると、中村が横山を呼び寄せた。「実は、義父の野中からの命令で、今度の衆議院選挙に出馬することになった。お前にも迷惑をかけるがよろしく頼む」

実は、中村はすでに六五を過ぎており、政治家としてデビューするには歳をとりすぎている。過去に何度か、野中から選挙への立候補を進められてきたが、固辞してきたのである。それは、もちろん、横山親子のためでもある。もし、中村が政治家になれば、そのプライバシーも暴かれる可能性がある。それを中村は心配していたのだ。

しかし、中村が野中の女婿であることは周知の事実である。野中の後継者とみる専門家も多かったのである。それにもかかわらず、中村は民自党が不利になるようなことも平気でしゃべっていた。一昔前ならば、党の力で失脚させられていたかもしれないが、もはや、そんなご時世ではない。

それに、中村の話は、非常に論理的で首尾一貫していた。その発言は、テレビの視聴者にも、なるほどと思わせることが多い。最近、テレビの討論番組を見ていると、司会者が愚劣なせいもあるが、出演者が、自分の意見をころころと変えて、何を話したいのか分からない。多くの評論家は、他人の批判はするが、それでは、あなたに建設的な案はあるのかと聞かれたとたん口をつぐんでしまう。高邁な志があって、発言しているのではなく、とにかく反対をとらえて喜んでいるだけなのだ。中村は、相手を攻撃する時は、必ず対案を示していた。それだけに好感が持たれるのである。

横山は、野中が中村を担ぎ出すであろうことは分かっていた。しかし、父はそれほど若くはない。これまでも、出馬のチャンスはいくらでもあったが、父は、それを断ってきた。このため、横山は、父は選挙に出ないとなかば期待していたのだ。

しかし、現在の政治状況がそれを許さなかったということだろう。いざ、父から選挙に出るとい話を聞いて、横山は、正直、大変なことになると思った。いままでのように父は母のもとを自由に訪れることもできなくなる。自分の存在も、問題になる可能性もある。政治の世界は、魑魅魍魎が跋扈する世界である。自分のライバルを蹴落とすためなら、どんなことでも利用する。

横山は、そんな自分の心配を韜晦した。そしてこう言った。「選挙ですか。大変だとは思いますが、お父さんも頑張ってください」と横山は父を激励した。

父の話によると、民自党の若手のホープと見られていた党の副幹事長の渡部

正一議員の経歴詐欺事件にともなう失脚により、党は危機的な状況にあるという。その中で、野中が考えたのが、論客による党の建て直しである。そして指名されたのが父の中村泰三であった。

中村は、今回も出馬を固辞した。そして、民自党の多くの議員が進めようとしている

「日本が国連の安全保障理事会の常任理事国を目指すこと」

には反対であるという明確な見解を示した。それでも良いかと確認したところ、野中は、アメリカに見放されたのでは、そんなことは到底無理である。常識のある国会議員なら、もはや無理な話ということは明らかで、いまさら、それが問題になることはないと言断した。

中村は、立候補にはかなり躊躇したようだが、野中の再三にわたる要請に、最後は納得したという。母の玲子には、すでに立候補の話をしているという。

「国会議員にもしなったら、かたちだけとはいえ、正妻の恭子をつれて歩かなければならない」

と中村は言った。

正妻の恭子とは、もはや夫婦の関係ではないが、さすがに政治家の娘だけあって、政治家の妻という地位にはあこがれているという。野中も、子供の産めない娘のことをずっと気にかけていたが、これでようやく恭子も気が晴れるだろうと喜んでいる。政界入りした際には、中村には、それなりの地位が与えられるはずだ。場合によっては、将来の総理大臣候補とも言われたらしい。

バンケット

国際会議の二日目も何も問題なく過ぎていった。横山はキャシーの講演を聞きにいったが、その内容の素晴らしさと、巧みな話術にすっかり魅せられた。いやがうえにも、時の流れというものを感じさせられた。

昔、いっしょに飲んで騒いで遊んだ相手が、いまや押しも押されもせぬ論客として活躍し、しかも大統領のブレーンを勤めているのである。キャサリンから見れば、横山が大学で助教授をしているということこそ驚きかもしれないが。

山田の緻密な会議運営もあって、これまでのところ、参加者は、みな会議に満足しているようだ。今日の夕方には、バンケットが開かれる。国際会議では、バンケットでいかに参加者に喜んでもらえるかも重要な要素のひとつとなっている。ある会議では、高い金をとりながら、料理があつという間に終わって、主催者が金儲けのために開いたのではとまで揶揄されたことがある。この結果、会議の内容そのものは比較的良かったにも関わらず、長年、研究者の間で、あの会議はひどかったと言い伝えられるのである。

バンケットは、ホテルの宴会場で立食形式で行われる。料理は和洋とりそろえたもので、すしコーナーやそばコーナーも設けてある。バンケットの司会は横山が務めることになっているが、急遽、典子にも司会の補佐を頼むことになった。バンケットが始まる五分前には参加者で会場はあふれていた。冒頭の挨拶をお願いしている吉野学長もスタンバイしている。

横山は、貸衣装のタキシードで身を包んでいた。日本人にはタキシードは似合わないが、背の高い横山が着ると様になっていた。典子が姿を見せないの、心配していたら、着物姿の典子が現れた。横山は、その美しさに目を奪われた。多くの外国人参加者も「ワンドフル」と賛辞を送っている。山田もいきな計らいを見せるなど横山は感心した。

バンケットは、順調に進んでいた。前もって、祝辞は短めにするように来賓に念を压したのが良かったのかもしれない。実は、日本で開く国際会議で評判の悪いのが来賓の挨拶である。くだらない内容を時間をかけて話す。通訳などつけようものなら、ただでさえ長い話が二倍になる。今日の来賓には、すべて英語で話すようお願いしてあった。横山と典子の巧みな司会もあって、パーティーは順調に進んでいた。急遽、お願いしたキャサリンの挨拶は、ユーモアにあふれ、参加者を和ませた。

いよいよ、後はメインのコンサートである。大学の吹奏楽部員に日本の歌を数曲、披露するように依頼していた。プロに頼めば、お金がかかるうえ、どうしても時間も長くなる。パーティーでは、あまり時間をかけずに、しかも、日本で開催された国際会議であるということに参加者に印象づけるようなアトラ

クションが重要である。山田は、一曲の長さがあまく長くならないようにも調整していた。

ところが、コンサートが近づいてきた時に、山田があわてて入ってきた。

「横山先生、吹奏楽部の部員の乗せた車が渋滞に巻き込まれたようです」

部員は、今日の午後一番に、別の会場で演奏会有り、そこから車で到着する予定だったのである。時間的に余裕があるというので安心していましたが、首都高で交通事故があって、完全に渋滞に巻き込まれてしまったようなのだ。

山田は、せっかくのアトラクションがなくなるのは残念だとくやしだったが、事故ではどうしようもない。

意を決した横山は、マイクを握ると参加者に詫びた。

「みなさん、残念なお知らせがあります。日本の歌をテーマにしたコンサートを企画しておりましたが、演奏家たちが都合で来れなくなってしまいました。残念ですが、コンサートは中止です。このまま歓談を続けて下さい」

いたずらに時間をひき延ばすよりも、正直に話をして素直にわびた方がよい。これが、横山が長年の経験から学んだ最善の対処策であった。

すると参加者からは

「残念だがしかたがない」

という声が聞かれた。

実は、曲の演奏の合間に横山が、日本の歌の由来を説明するという演出を考えていたのだ。単に曲を聴くだけよりも、その方が曲に親しみがわく。

すると、キャサリンが突然こう言った。

「それならば、タクがかわりに歌ってよ。あなたは、歌手としても最高よ。ピアノもうまく弾けるでしょう」

横山は、アメリカに居た頃、みんなにせがまれて日本の歌を披露したことがある。もちろん、カラオケにも何度も行った。アメリカではカラオケが大人気なのである。会場の横には、ピアノがあるが、即興でピアノを演奏しながら曲を歌うのは大変だ。そう思っていると、会場から

「タク、タク、タク・・・」

と参加者から歌を披露しろというリクエストの音が響き出した。

みな、面白そうになりゆきを見守っている。ここで、辞退したのでは、場がしらけるだろう。そう思った横山は、意を決した。

すると、典子が

「よろしかったら、私がピアノの伴奏をしましょうか」

と申し出た。山田は

「実は、典子は研究者になるかプロのピアノ演奏家になるかを迷ったほどの腕前です。典子なら、楽譜がなくとも、かなりの曲は演奏できます」

横山は

「分かりました。演奏は典子さんに任せましょう。歌は赤とんぼにします。典子さんいいですか？」

すると典子は

「ええ、分かりました。最初の音さえ言ってもらえれば伴奏から入ります」と答えて、ピアノに向かった。

「それでは典子さん、最初の音はCでお願いします」

そう言って、壇上に登った。

「紳士、淑女のみなさん、今日は、日本の歌コンサート会場によく来ていただきました。今夜は、プロの演奏家が来れなくなったので、かわりにプロの歌手を呼びました。名前はタク・ヨコヤマです」

と冗談を言った。

「そして、ピアノの演奏は、数々のピアノコンクールを荒らしまわって世界に名を馳せたノリココ・ヤマダです。

なお、ノリコは、全然、顔は似ていませんが、この会議のフィクサーであるプロフェッサー・ヤマダの妹さんです」

と紹介した。

会場からは、やんやのかっさいを浴びた。山田は、横山のエンタテイナーぶりに舌を巻いた。スケジュールの急な変更を、自分の味方にしている。

横山が合図すると、典子が演奏を始めた。

確かに演奏は抜群であった。典子がプロを目指したという話は本当であろう。そこに横山の歌がはじまった。

「夕焼け小焼けの赤とんぼ、負われて見たのはいつの日か」

山田は驚いた。本当にプロ顔負けの歌声である。思わず、全身がゆすぶられるような感覚を覚えた。

会場も、ユーモアたっぷりの前口上の後に、それとは、まったく逆の、素晴らしいピアノの演奏と、それにかぶさるような素晴らしい歌声の競演に酔いしれた。一節を歌い終ったとたん会場からは大きな拍手が寄せられた。

横山は、そこで典子にいったん演奏を止めるように指示し、この歌の意味を英語で説明した。会場は静まり返った。作詞家の三木露風は、幼い頃、母に捨てられ、祖父のもとでねえやに育てられた。その時の歌である。

ふたたび、横山は演奏を始めるように典子に指示を出した。

「ねえやは十五で嫁にゆき、お里の便りも絶え果てた」

母とも慕うねえやは若くして嫁いでいってしまった。その寂しさが歌詞にあふれている。

横山のきれいな歌声は、その歌詞のなんとも切ない物悲しさとあいまって、会

場の参加者の心を打った。

「山の畑の桑の実を、小かごに摘んだはまぼろしか」

「夕焼け小焼けの赤とんぼ、とまっているよ竿の先」

歌が終わると、会場からは万来の拍手が送られた。それは、お世辞ではない、心のこもった賞賛であった。

つぎに横山が選んだ曲は

「かあさんのうた」

であった。

「かあさんがよなべをして、てぶくろあんでくれた」

で始まるこの歌は、日本がまずしかった頃の田舎の姿と、そして母の愛情を切々と歌ったものである。

「木枯らしふいて冷たかろうて、せっせとあんだだよ」

横山は、この節を歌う時、いつも母親のことを思っていた。

中学校で、横山はいじめにあった。あまり、いじめは苦しなかったが、制服の背中に

「テテナシゴ」

と白ペンキで書かれたまま帰ったときには、母がとても悲しそうな顔をしていた。それを見て、少しショックを受けた。

横山は

「ててなしご」

という意味が分からなかったが、母に、その意味を聞いても答えてくれなかった。

いつも、明るい母が沈んだ顔をしているので、横山はそれ以上何も聞くことができなかったのだ。夜中にふと目が覚めると、母が必死に横山の制服を洗っていた。ペンキだからとあきらめていたが、つぎの日の朝には、すっかりきれいになっていた。横山は、この歌の一節を口ずさむ時、母の愛情の深さとともに、あの日のことを思い出すのだ。

最後に、横山が選んだ歌は

「上を向いて歩こう」

であった。

この歌は、はじめて日本の歌が全米ヒットチャートで一位を飾った歌であり、海外のひとにもなじみが深い。横山がアメリカに居た時、必ず友人からリクエストされた。

「うえを向いて歩こう。なみだがこぼれないように」

という永六輔の傑作である歌詞の意味を説明しながら歌うと、最後は、会場が大合唱になった。

横山の歌と、典子の演奏が終わると、会場からは

「ブラボー」

という声と大きな拍手が沸き起こった。その拍手はいつまでも鳴り止まない。アンコールを求めているのだ。横山は、時間が余裕のあるのを見て

「それでは、アンコール曲としてジョンレノンの「イマジン」を歌います。皆様も一緒に歌って下さい。」

典子は、突然の横山のリクエストにも平気で伴奏を始めた。

天国というところなどないと思っごらん

そうすれば簡単な事

僕たちの足下に地獄はなく

頭の上にあるのは空だけ

みんなが今日のために生きると思っごらん

国なんかはないと思っごらん

それは難しいことではない

殺し合いをする原因もなくなり

宗教もなくなり

みんなが平和な人生を送っていると思っごらん

財産なんかはないと思っごらん

君に出来るかな

欲望や飢えの心配もなく

人間はみな兄弟

みんなが全世界を分かち合っていると思っごらん

人は僕を夢想家と言うかもしれない

だけど僕ひとりじゃない

いつの日か君たちも僕の仲間になって

世界がひとつになったらいいと思う

この歌のように、世界平和をいかに実現するか。それが、国際政治学が向かうべき究極の目標である。しかし、いまの国際関係は、パワーゲームに陥っている。自国の利益を優先してしまうあまり、世界各所で軋轢が生じている。この歌のように

「世界中のひとびとが平和に暮らせる社会」

は来るのであろうか。

中村は、日本と世界の違いは、世界では宗教が国家間の紛争に大きな影響を与えるということだと言ったことがある。ジョンレノンも、宗教さえも否定した。それによりパチカンの不評を買ったこともある。

山田は、横山がこの曲を選んだ意図が、この会議へのアンチテーゼではないかとふと思った。もし、国境もなく宗教も無く、みなが平等に暮らせる社会が来たとしたら、国際関係を論じる必要はなくなる。山田の買いかぶりすぎだろうか。

バンケットは無事終わった。大成功であったと山田は感激した。

さすがに横山は手馴れている。突然のプログラム変更にも、見事に対応してくれた。典子は、海外の参加者から、ぜひ一緒に写真に写って欲しいと大人気である。横山のもとにも、大勢が押しかけ、賛辞を送っている。

山田の横に、ふと、キャサリンが寄ってきた。

「ノリコとタクは本当にお似合いね。わたしの勘は、はずれていなかったわ」と勝手なことを言っている。

しかし、本当に、今日のふたりはすごかった。山田はすこし寂しさを味わった。大好きな妹の典子が自分から離れていく。そんな気がしたからだ。

